湖水地方とナショナル・トラスト（1）

浅　井　千　晶

1　イギリス湖水地方とナショナル・トラスト

イギリス北西部カンブリア州にある英国屈指の景勝地・湖水地方は日本で最もよく知られた観光地の一つだろう。豊かな水をたたえた湖は４５００年前の氷河期に大地が深く削られて生まれたもので、東西約５０キロ南北約６０キロの地域に大小合わせて５００以上の湖がある。湖水地方はまた、丘陵の多いイギリスにあって１０００メートル近い山が連なり、川や滝も点在し、変化に富んだ景観を作り出している。かつては辺境の地だった湖水地方が旅行者をいざなう景観の地へと変化したのは崇高さやピクチャレスクなものへの趣味が広まった十八世紀後半であり、湖水地方の旅行記や旅行者のための案内書も出版されるようになった。[1] 詩人トマス・グレイ（Thomas Gray, １７１６－７１）は晩年『湖水地方日誌』（１７６９）を記し、湖水地方に生まれ育った詩人として有名なウィリアム・ワーズワス（William Wordsworth, １７７０－１８５０）は『湖水案内』（初版１８１０、最終版１８３５）において、旅行者への案内も含めて湖水地方の景観を描写している。湖水地方とイギリス環境保護思想との関わりに興味を抱いていた筆者も機会を得て、２００４年7月２１日から２５日まで、南のウィンダミアから入り北のケジックへと抜ける湖水地方の旅をすることができた。５日間と短くはあったが幸い好天気に恵まれ、湖水地方の自然の魅力の一端を堪能することができた。この間、湖水地方の約４分の１をナショナル・トラストが所有するだけあって、ナショナル・トラストのマーク――どんぐりをつけたオークの葉――を各地で見かけた。また、ナショナル・トラストの数多くの資産（プロパティ）では多くのボランティアが案内等に従事していて、この地方の環境保全に貢献しているのを目の当たりにした。

ナショナル・トラストのマーク

湖水地方とナショナル・トラストは縁が深い。英国の環境保全団体であるナショナル・トラストは正式名称をThe National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty（歴史的名勝および自然的景勝地のためのナショナル・トラスト）と言う。よく知られているように、ナショナル・トラストは、産業革命後の都市化と開発の波から美しい自然や由緒ある建造物を守るために、弁護士のロバート・ハンター（Robert Hunter, １８４４－１９１３）、社会活動家のオクタヴィア・ヒル（Octavia Hill, １８３８－１９１２）、湖水地方でイギリス国教会の牧師をしていたハードウィック・ローンズリー（Hardwicke Rawnsley, １８５１－１９２０）を中心に、１８９５年に設立された。ナショナル・トラストの「ナショナル」は「国家の」という意味ではなく「国民の」という意味で、「価値ある美しい自然や歴史的建造物を維持し、国民が使用し享受できるように壊さず保護する」ことを目的とした民間の非営利団体である。設立から１００年余りたった現在では、ナショナル・トラストは約３３０万人の会員を擁し、５７万エーカーの自然の景勝地を所有するのに加え、7万8千エーカーの土地を所有者と契約を結ぶことによって保護し、３００以上の歴史的・芸術的に価値ある建造物や庭を維持管理している。[2]

湖水地方の景観は自然のままに無作為で美しく保たれているのではない。十九世紀に鉄道が急速にイギリス全土に普及する折から、湖水地方にも１８４０年代から鉄道敷設が始まった。鉄道によって大衆が容易に湖水地方に訪れるようになることの是非は意見が分かれるだろう。だが１８４４年、ワーズワスは湖水地方の南の入り口ケンダルからウィンダミア湖をつなぐ鉄道の敷設計画に対し異議を唱え、鉄道敷設はウィンダミア湖の少し手前で止まった。１８７６年、その鉄道をウィンダミアからさらにウィンダミア湖北岸の町アンブルサイドを経て奥地のダーウェント湖北岸の町ケジックへと延長する計画が持ち上

ウィンダミア湖

がったときにも反対運動が起き、この計画は実現しなかった。さらに１８８３年、鉱山開発のためダーウェント湖の西岸を通ってバタミア峡谷へいたる鉄道の建設計画が明らかになった。この時、何人かの先人に続いて湖水地方の景観を守る運動を本格的に展開したのがハードウィック・ローンズリーで、彼がロンドンを拠点に環境保全運動を進めていた他の二人、ロバート・ハンターとオクタビア・ヒルとともにナショナル・トラストを１８９５年に創設することになるのである。現在にいたるまでウィンダミア湖より先には鉄道が通らず、そのことも湖水地方の景観を美しいものに保つのに貢献しているのだ。

『ピーター・ラビットのおはなし』（１９０２）で知られるビアトリクス・ポター（Beatrix Potter, １８６６－１９４３）も湖水地方とナショナル・トラストの関わりを考える上では欠かせない人物である。ポターは裕福なロンドンの中産階級の家に生まれ、少女時代に湖水地方に避暑に来て父の友人ローンズリー牧師と出会った。動物や自然を愛したポターは、湖水地方を舞台にピーターたち小動物の物語を描き、１９０５年にニアソーリー村のヒルトップ農場を購入、その後も印税収入などをもとに次々購入した湖水地方の４，０００エーカーの農場や土地すべてを遺言でナショナル・トラストに寄贈した。ポターが寄贈した土地を含めてナショナル・トラストが所有する湖水地方の資産はよく保存されており、ピーター・ラビットの世界を求めて毎年世界中から多くの人が訪れている。

ヒルトップ農場

2　ダーウェント島

湖水地方北部、山に囲まれたダーウェント湖は「湖の女王」とも呼ばれる長さが約４．８キロ、幅が最も広いところで２．４キロの美しい湖で、いくつかの小島が湖面に見える。その一つ、ダーウェント湖北岸よりに浮かぶダーウェント島は中世には修道院の所有地だった。それゆえ、当初は「教区司祭の島」と呼ばれ、ワーズワスの『湖水案内』にもその名で言及されているが、１８３０年代に現在の「ダーウェント島」の名で知られるようになった。

ダーウェント島は一周するのに半時間ほどの小さな島だが、遠くにスキドー山を望む景色はすばらしい。景観の美しさに惹かれて１７７８年に島を購入したジョゼフ・ポクリントン、ポクリントンから１７９６年に購入したウィリアム・ピーチーの後、１８４４年にヘンリー・マーシャルが購入し、ダーウェント島はマーシャル一族の所有となった。１８９４年に島を継承したジョン・マーシャルの時代には、ナショナル・トラストの３人の創設者もしばしばダーウェント島を訪れている。[3] ジョン・マーシャルの弟たちもナショナル・トラストの地区委員として活躍し、その一人デニス・マーシャルによって、ダーウェント島と湖の南にあるセント・ハーバート島は１９５１年にナショナル・トラストに寄贈された。現在は、ナショナル・トラストから島内唯一の邸宅ダーウェント・ハウスを借り受けた人がダーウェント島の住人である。

ダーウェント島

十九世紀様式の邸宅ダーウェント・ハウスと樹木に囲まれ、湖を望むテラスや手入れされた芝生がある庭は、オープンハウスという形で年に５日、一般公開されている。[4] ６月に開催予定だった２回が湖水量不足で船の運航が危険という理由でキャンセルされていたため、私がダーウェント島を訪れた７月２５日が今年はじめてのオープンハウスで、たいへん幸運だった。ダーウェント湖畔北の船着き場横に小さなナショナル・トラストの店があり、人数管理のため時間指定されたチケットを購入した。入島料はナショナル・トラスト会員が２ポンド、非会員は４．１ポンドだった。

湖畔のナショナル・トラスト・ショップの店員によると、オープンハウス当日にダーウェント島で活動していた約３０人は全員ナショナル・トラストのボランティアだった。ダーウェント島に往復する船の世話、島での道案内、邸宅への出入りを管理する人、邸宅の中で各部屋の説明をする人、ピアノを弾く人、それぞれがにこやかに熱心に

応対してくれた。島の見所を私に案内してくれた女性は湖水地方の北にあるカーライルに住み、当日早朝に来たとのことだった。湖が美しく見える場所、樹木に関する昔の言い伝えなど知識豊富で熱心に説明してくれていたが、禁止されているにもかかわらずダーウェント島に無断で上陸しようとするボートを見つけると、制止するため水辺に急いで走っていった。彼女の様子から、美しい島と湖を愛おしく思い、ナショナル・トラストの活動に誇りを持っていることが感じられた。

今回訪れた他のナショナル・トラストの資産（プロパティ）である、ポターの原画や当時の記録が展示されているビアトリクス・ポター・ギャラリーやポターが所有していたニアソーリーのヒルトップ農場でも、全英で年間4万人にも及ぶというナショナル・トラストのボランティアが活躍していて、ナショナル・トラスト運動が国民に浸透していることを実感した。

3　資産の保存と公開のバランス

日本を出発する前から気になることがあった。海外から多くの観光客が訪れることの環境への負荷のことだ。湖水地方には年間一千万人をこえる観光客が訪れるという。多数の観光客の到来は地域の観光産業には貢献するだろうが、環境保全の観点からはどうなのだろうか。

ナショナル・トラストは資産の「保存と公開のバランス（The balance between preservation and presentation）」および「アクセスと保護のバランス（The balance between access and conservation）」を設立当初から主旨としている。当然のことながら、保存が一般への公開より優先される。１９２０年代後半にトラストの議長であったジョン・ベイリーの「保存はつねにアクセスを許す。ところが保存がなければ、アクセスは永久に不可能となる」という言葉が今も原則として生きているのだ。[5] 確かにナショナル・トラストの資産は毎日公開されているわけではない。資産の手入れのために年間の公開期間を限定し、資産への入場時間や人数を制限している。また、資産が損傷されることのないよう細やかな配慮がなされていた。それにしても、大量の訪問者は環境への負荷になるのではないかと自分への反省も込めて考えた。

ナショナル・トラストのウェブサイト上の「政策とキャンペーン」頁に「ブルー・スカイズ・レポート」（Blue Skies: air travel demand and tourism）という政府の飛行場を拡張・増設する方針を疑問視する報告が掲載されていた。[6] そこでナショナル・トラストは、英国政府に飛行場拡張計画を再考し、国内旅行を促進するよう呼びかけている。その理由として以下の点が挙げられていた。

（1）英国政府は飛行機利用の需要が今後さらに拡大すると予測しているが、それには確かな根拠はない。
（2）英国人が飛行機を利用するのは仕事より余暇が目的の場合が多く、飛行場を拡張・増設することが英国ビジネスに多大な効果をもつとは考えがたい。
（3）英国から他国への旅行者の数は増加しているが、他国から英国への旅行者は１９９８年以来減少しており、観光業の収支バランスは既に英国にとって赤字である。
（4）飛行場の拡張・増設は騒音・景観の点で飛行場周縁の環境にダメージを与え、その損傷はその地域への観光客の減少につながるので、飛行場建設により多少の雇用が発生するとしても、経済効果はない。

この報告では、飛行場拡張の代わりに国内旅行の便宜を図ることにより、環境破壊を避けることができるだけでなく、英国の地域経済と共同体の再生にも効果があると提言されていた。

一方、今回の英国旅行中、「ナショナル・トラスト会員――思い出深い英国旅行のパスポート」というナショナル・トラストへの入会を呼びかける７カ国語で書かれた小冊子を何回か見かけたし、日本人に人気のあるヒルトップ農場やビアトリクス・ポター・ギャラリーでは日本語の案内もあった。また、海外からの英国短期滞在者が割安でナショナル・トラストの資産を訪問できるように、「ナショナル・トラスト・旅行パス」もウェブ上で販売されている。ナショナル・トラストは海外から観光客が訪れることを歓迎しているのだろうか？　海外から多数の観光客が訪れることはナショナル・トラストの資産に何らかの損害を与えるのではないだろうか？

訪問者、特に海外からナショナル・トラストの資産への訪問者についてのナショナル・トラストの見解を知りたく、7月26日、ロンドンのセントジェームズ公園の南隣クイーン・アンズ・ゲート36番地にあるナショナル・トラスト本部を訪ねた。受付で資産の保存と一般への公開のバランスについて質問したところ、受付係が親切に応対してくれ、当日は不在だった担当者のメールアドレスを教えて下さった。日本に帰国後電子メールで質問したが、しばらくして二、三日中に返事するという返信が来たのみで、再度問い合わせた際には、筆者の「メールを<政策と戦略>チームに転送した」という返信を頂いたものの、結局何の回答も得られなかったことは少々残念であった。環境保全と地域経済の振興の問題は、イギリス湖水地方に限らず、観光地化した景勝地における現代の共通の課題と言えるだろう。今回の旅はその問題を再認識させるものだった。

注

1　小田友弥　「ワーズワスと湖水地方旅行」、*ASLE-Japan Newsletter* 12 (2002):1-3頁を参照。

2　英国ナショナル・トラストのウェブサイト http://www.nationaltrust.org.uk 記載の "Portsmouth 2003: Minutes of the National Trust Annual General Meeting held at The Guildhall, Portsmouth on Saturday 15 November 2003," 2004年8月15日、に拠る。

3　Murphy, *Founders of the National Ttust,* 111.

4　ナショナル・トラストが毎年発行している *The National Trust Handbook for Members and Visitors 2004* の284頁にダーウェント・ハウスの情報が記載されている。

5　英国ナショナル・トラストのリーフレット "The National Trust: Access and Conservation" に拠る。

6　The National Trust/Policy & Campaign, http://www.nationaltrust.org.uk/main/policy, 2004年6月10日および2004年9月5日。

引用／参考文献

Jonathan Bate. *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition* (London: Routledge, 1991) [ジョナサン・ベイト、小田友弥・石幡直樹訳　『ロマン派のエコロジー――ワーズワースと環境保護の伝統』(青土社、1999年)]。

Alex Black and Hazel Gatford. *Wordsworth's Lake District: The Landscape and Its Writers* (Sevenoaks, Kent: J. Salmon Ltd., 2001).

Thomas Gray. "Journal in the Lakes, 1769," *The Works of Thomas Gray, Vol.1* (1884; New York: AMS Press, 1968), 247-81.

Graham Murphy. *Founders of the National Trust* (1987; London: The National Trust Enterprises Ltd., 2002).

The National Trust. *The National Trust Handbook for Members and Visitors* (London: The National Trust Enterprises Ltd., 2004).

Judy Taylor. *Beatrix Potter and Hill Top* (London: The National Trust Enterprises Ltd., 1989).

William Wordsworth. *Guide to the Lakes* (1835; London: Francis Lincoln, 2004).

木原啓吉　『ナショナル・トラスト[新版]』、三省堂、1998年。

木原啓吉監修　『The National Trust――市民が守る英国の環境と文化』、駸々堂、1991年。

高橋哲雄　『イギリス歴史の旅』、朝日選書、1996年。

四元忠博　『ナショナル・トラストの軌跡――1895～1945年』、緑風出版、2003年。